

2 トピック — いちごの需給動向について —

今回は出荷が最盛期となっているいちごを紹介する。

原産地と日本への渡来

栽培用のいちごは、18世紀にオランダで南アメリカのチリ種と北アメリカのバージニア種が交配され、大粒の品種が育成されたのが起源といわれている。その後、イギリス等で品種改良されてアメリカに伝わった。

日本には、江戸時代末期にオランダ人によって長崎に伝えられたことで、“オランダイチゴ”と呼ばれていた。しかし、野生のいちごを食べていた当時の日本人にとって、あまりにも大粒だったので普及しなかった。

日本では、明治32年(1899年)に福羽逸人博士がフランスの品種を改良し、これを“福羽”と命名し、栽培が始まったとされている。戦後の高度成長に伴って、ハウス栽培が普及し、“福羽”から多くの品種が生まれると、生産量が飛躍的に増え、身近なものとなった。

主な種類と特徴

明治32年(1899年)に“福羽”の栽培に成功したのをきっかけに、これを“交配親”として次々と新品種が生まれた。1960年代までは春から初夏にかけて出荷されていたが、食生活の変化で需要が増加し、また、クリスマス需要にも対応するため、ハウス栽培の普及や品種改良により11月から6月に出回る冬春いちごの栽培体系が確立されている。国内産の出荷量が極端に少ない夏場には、業務用として米国産いちご等が輸入されている。また、ロールケーキ等スイーツの高級志向の高まりから、国産いちごの業務需要も増加している。

生産状況等

「野菜生産出荷統計」によると、平成19年に6580ヘクタールあった作付面積は平成28年には5370ヘクタールと徐々に減少している。出荷量も同様に平成19年の17万30004トンから平成28年の14万5000トンと徐々に減少している(図1)。28年の産地別出荷量では最も多いのが栃木県の2万3400トンで全国の16%を占めている。2番目が福岡県の1万4800トン(同10%)となっている(図2)。東京中央卸売市場における平成28年の入荷量は、冬から春にかけて多くなり、3月が最も多い5252トン入荷となっている(図3)。「日本貿易統計」によると、いちごの輸入は、直近10年では3万トン台となっており、冷凍で輸入されるものが最も多く7～8割を占めている(図4)。

図1 いちごの作付面積と出荷量

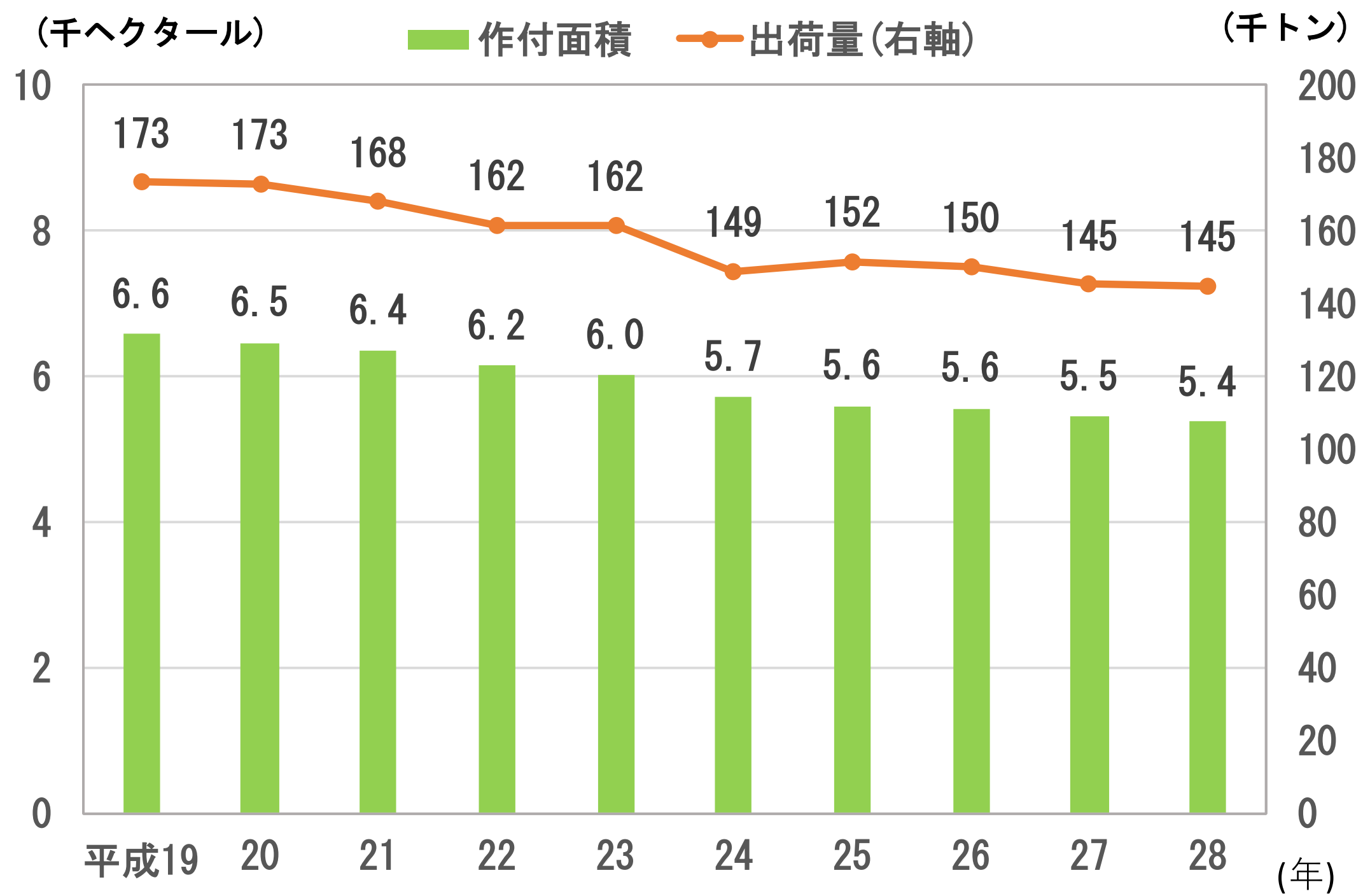


図2 いちごの産地別出荷量(平成28年)

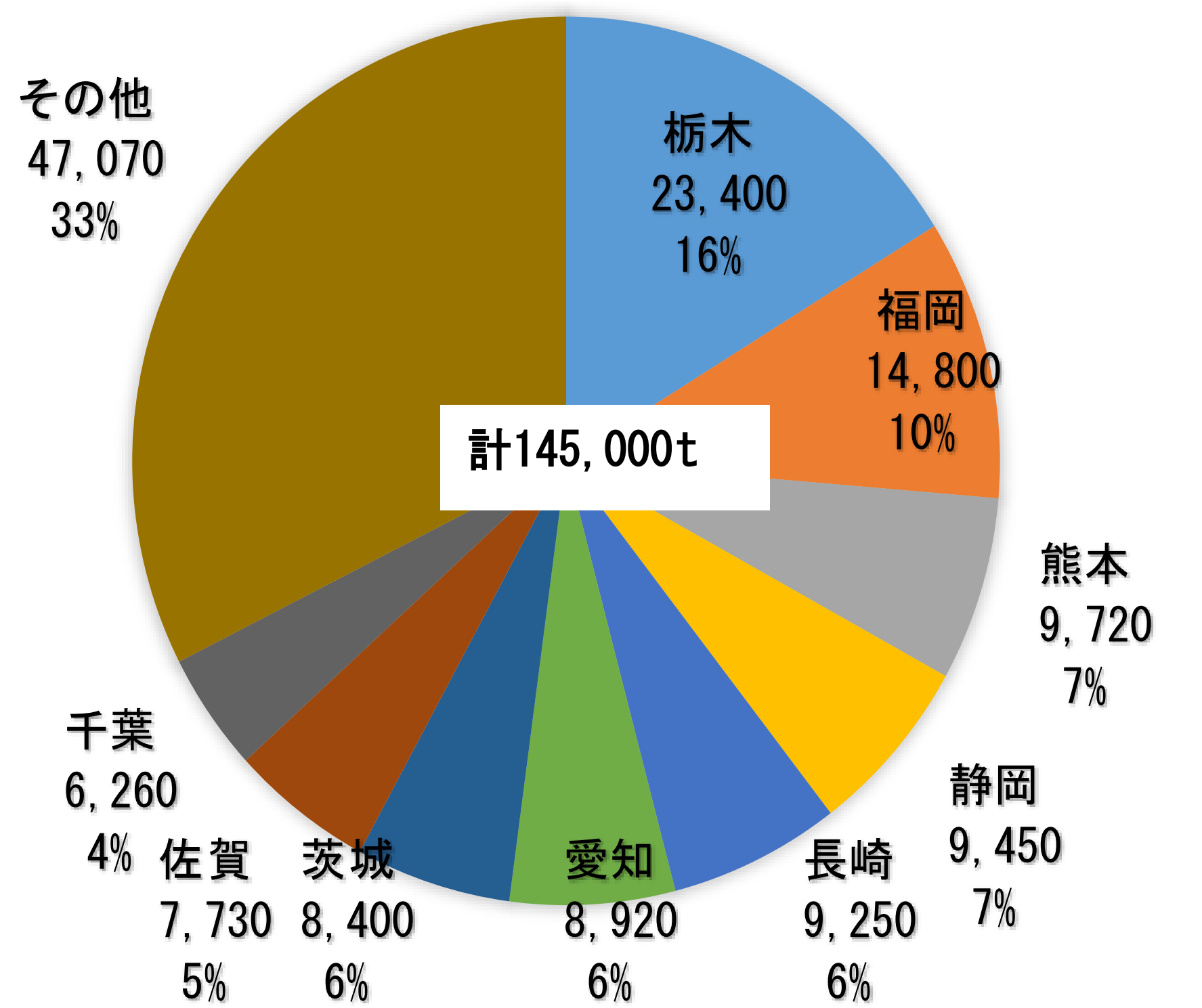


図3 いちごの平成28年月別入荷量
(東京都中央卸売市場)

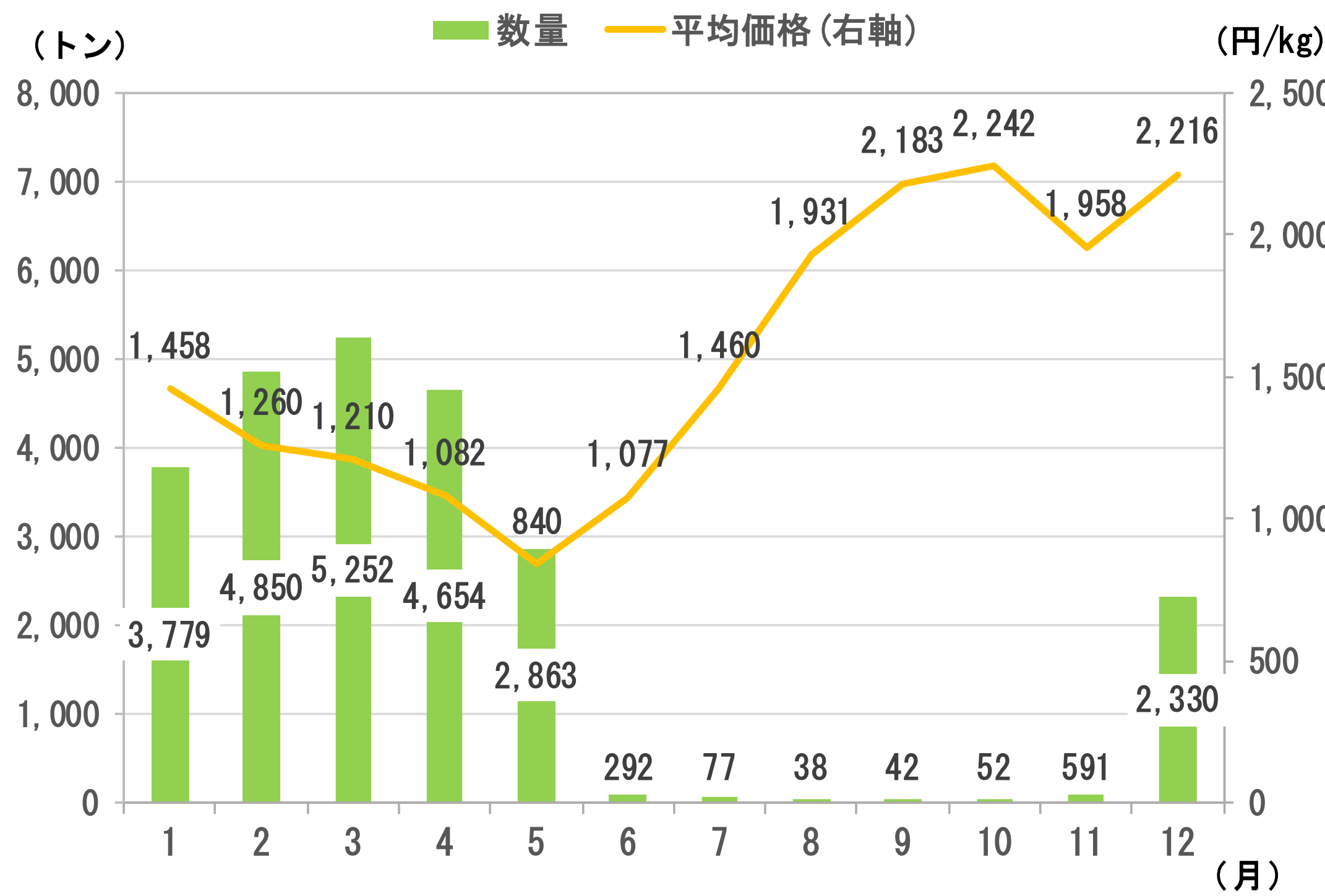
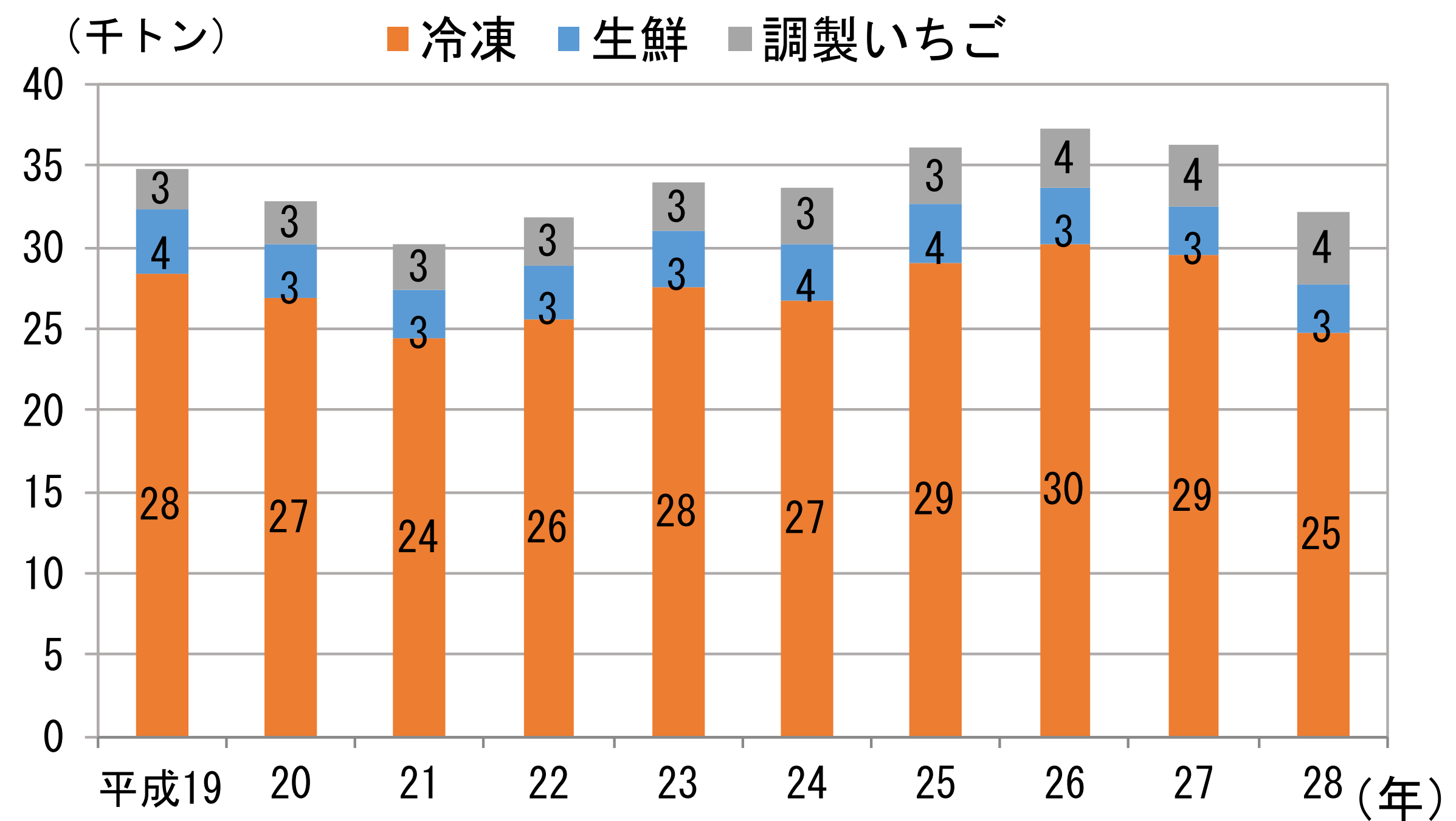


図4 いちごの輸入量



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：図1、図2 農林水産省「野菜生産出荷統計」 図3 東京都中央卸売市場「市場統計情報月報」 図4 財務省「日本貿易統計」）

●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 安藤、松岡、植村 TEL03-3583-9448、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

◆「野菜の需給・価格動向レポート」は月2回公表しています。公表時にメルマガでお知らせしますので、ご希望の方は当機構のホームページのトップ画面、メールマガジンから登録してください。

★この「野菜の需給・価格動向レポート」は、http://vegetan.alic.go.jp/vegetable_report.html に掲載しています。

※無断転載禁ず ・レポートに記載された情報をご利用になったことにより生じたいかなる損害に関して、当機構は一切の責任を負いません。